

国立国語研究所学術情報リポジトリ

八戸市方言民話資料における文末テンス・アスペクトの分析試論

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 公開日: 2021-03-26 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 寺嶋, 大輔 メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.15084/00003274

八戸市方言民話資料における 文末テンス・アスペクトの分析試論

寺嶋大輔³¹

1. はじめに

方言の保全活動は、民話の伝承活動と親和性が高い。たとえば、民話の語り手は自分たちの母語である方言にも強い関心と思い入れを持っていることが多く、各地で開かれる方言イベントにおいても、方言による民話語りは人気コンテンツの一つとなっている。

八戸市方言についても、八戸市公民館館長の柗谷伸夫氏が「南部昔コ語り部養成講座」を毎年開講して人気を博しているほか、毎年12月に開催される方言イベント「南部弁の日」では老若男女問わず様々な市民が方言による「昔コ」を楽しんでいる。「方言による昔コ語りは（筆者注：子どもたちの南部弁との接触機会の足掛かりとして）有効な手段の一つとして利用していただけるのではと思います」（柗谷、2016）ともあるように、八戸市方言の活性化事業において、民話は大きな役割を期待されている。

ところで、民話で語られる方言は、日常会話でみられる方言とは異なった特徴をいくつか持っている。一例を挙げれば、民話は「過去にあったと伝えられる出来事を語る」というシチュエーションのためか、文法的にはタ形などのテンス・アスペクト表現が多用される。こうした民話資料に登場する特徴的な方言表現を詳しく分析すれば、日常会話の調査だけでは気づきにくい方言の側面を明らかにできることが期待される。

一方で、民話資料について言語的に分析する際には、同時に民話語りという文体の独自性も考慮する必要がある。民話のテキストは、「架空の物語を語り手が語る」という点において三人称小説のそれに近い性質を有していると言うことができ、そういう意味では、小説の文体論が援用できそうな側面もある。ところが、小説が「架空の語り手が架空の聞き手に架空の空間を超えて一方通行的に語りかける」という形式を持っているのに対して、民話語りの場合は、実在の（その場にいる）語り手と実在の（その場にいる）聞き手が実在の同一空間を共有しながら、語り手が聞き手を巻き込むような語りかけをしばしば行い

³¹ てらしま だいすけ：東北大学文学研究科

ながら物語が展開される。そのような民話語りの特徴は、民話のテキストの文体においても少なからぬ影響をもたらしていることが考えられる。

本研究では、八戸市方言で書かれた民話資料について、テンス・アスペクト表現に注目して調査を行い、民話語りテキストの独自性に注意しながらその特質について探索的に分析を試みる。

2. 調査資料「南部昔コ語り部養成講座テキスト」について

本論に入る前に、本研究で用いる調査資料「南部昔コ集語り部養成講座テキスト」について紹介させていただきたい。

この調査資料の主な底本になっているのは、八戸市の郷土史家・正部家種康氏（1925-2012）が生前に聞き歩いた南部地方各地の「昔コ」を編集・出版した民話集 2 点である。正部家氏の民話集は、数編を除いて基本的に共通語で書かれていたのだが、これらを先述の榎谷伸夫氏が八戸市方言に「再翻訳」・再話し、2013 年に初回が開講された「南部昔コ語り部養成講座」のテキストとして用いた。「語り部養成講座」という名前の通り、この講座は、南部地方に伝わる昔コを単に読んで楽しむだけでなく、次の世代へ語り継ぐための語り部を養成することを目的に開かれており、テキストはその語り聞かせのための台本のような性質を持っていると言える。また、このテキストは、多くの南部弁を知ってもらいたいという榎谷氏の思いから方言表現が多用されている、地域のラジオ放送にも用いるために長くなっている部分もあるなど、方言をより楽しむための工夫が多く施されている（榎谷、2014）。

今回調査資料として用いるのは、この「南部昔コ語り部養成講座」の第 1 回テキスト（榎谷、2019）³²として使用された計 80 話で構成される民話集である³³。

³² 榎谷氏との e メールでのやりとりによると、第 1 回テキストは 2013 年の初年度講座で用いて以来、毎年改良を重ねているという。本論で使用したのは、2019 年 12 月最終更新のデータである。

³³ 「南部昔コ語り部養成講座」の第 1 回テキストと第 2 回テキストに収録されていた民話は、若干の加筆・修正を加えたうえで、「南部昔コ集 第一集」(2014)、「南部昔コ集 第二集」(2016)として書籍化されている。講座テキスト版と書籍版は、表現方法等に多少の相違点はあるものの、物語の構成自体はほぼ同一である。

3. 調査方法

調査方法は、以下のように行った。

柗谷（2019）のうち、まず、作中人物が発していると考えられる台詞や唄の部分（釘括弧「」でくくられた箇所や庵点ゝで始まる箇所）、米印※で始まる箇所や括弧（）でくくられた共通語による解説部分等を取り除いた。これらを除去した結果集まった、語り手による地の文（ナレーション部分）について、「。」、「!」、「?」で終わる文を一文とカウントし、Excelで集計した。

こうして検出した合計 3,679 文について、主節述部にあらわれたテンス部分に注目してタ形、タッタ形、非タ／タッタ形に大別、続いてこれらをテ（イ）ルなどのアスペクト形式ごとに分類を行った（あきらかに誤字と見られる文は、分類から取り除いている）。なお、今回の調査はあくまで主節述部のみに着目しているため、主節ではなく従属節にテンス・アスペクトが現れている構造については、分析の対象外としている。また、当該方言の語彙や文法の概要を調べる際には、能田（1982）、平山・編（2003）を参考にした。

4. 調査結果と考察

まずテンス形式とされるタ形、タッタ形、非タ／タッタ形の出現文数を表したものが、表 1 である。

表 3 タ形、タッタ形、非タ／タッタ形の出現文数

	出現文 数	%
タ形	2,347	63.79%
非タ／タッタ形	776	21.09%
タッタ形	143	3.89%
体言止め・述部なし・倒置等	165	4.48%
その他 ³⁴	248	6.74%
合計	3,679	

³⁴ 「その他」には擬音や動物の鳴き声、「なんと！」などの感動詞、物語を締めくくるための定型の結末句「どっとはら〜い。」などが属する。

さらに、タ形、タッタ形、非タ／タッタ形についてそれぞれの完成／継続のアスペクト表現に注目して出現文数を集計すると、表2のようになった。

表 4 各アスペクト表現の出現文数

		出現文数	%
タ形 (2347 文, 63.79%)	タ	2184	59.36%
	テ (イ) ダ	96	2.69%
	テオリアンシタ	66	1.79%
	テラ	1	0.03%
非タ／タッタ形 (776 文, 21.09%)	無標	682	18.54%
	テ (イ) ル	52	1.41%
	テオリアンス	40	1.09%
	テアル	2	0.05%
タッタ形 (143 文, 3.89%)	テ (イ) ダッタ	61	1.66%
	タッタ	51	1.39%
	テラッタ	30	0.82%
	テアッタ	1	0.03%

この集計結果から、①完成相タ、②完成相非タ／タッタ、③完成相タッタ、④継続相非敬体（テ (イ) ダ、テラ、テ (イ) ル、テ (イ) ダッタ、テラッタ）、⑤継続相敬体（テオリアンシタ、テオリアンス）のそれぞれの特徴について、簡単な考察を試みる。

4.1. 完成相タ

まず全体を通して目を引くのが、全ての地の文のうち6割弱を占めるタ形の多さである。

- (1) まるって³⁵日照りが続いで、田んぼさ入れる水が不足して、田植えよ済ませだ苗が枯れそうだったじもえ。

「おんばの皮」

- (2) 婆様ァ、爺様さ³⁶鋤よ持だせ、ぼったで³⁶畑さ行がせだ。

「ネズミ穴に入った爺様の話」

³⁵ まるって＝とても（強い）

³⁶ ぼったでる＝追い立てる

しかし、このようにタ形が多用される理由は、本当に民話の物語が「過去の出来事」だからというだけだろうか。少々検証してみたい。

たしかに(1)、(2)のような物語中で発生した出来事や、作中人物が行ったことを客観的に記述した描写では、タ形が用いられることが多い。小説等のテキストの文体について研究した工藤(1995)は、タ形文は「作中人物の意識の対象化」を起こし、作中人物の内的視点そのものではなくなるという効果を持つことを指摘している。こうした小説における文体の特徴は、民話語りのそれにおいても援用できると考えられる。

(3) して、一口ガリッとかじってみだ。したっきゃ、したっきゃでエ、渋いごど渋いごど。喰れだもんでねえ。渋さは目ん玉ア飛び出すくらいだった。

「由来の話「弘法大師と渋柿」」

(3)の場面では、登場人物の婆様が渋柿を食べたときのリアクションが述べられている。「目玉が飛び出すくらいだった」というように渋柿の渋さをタ形で比喩的に表現しているが、前文までと同じく非タ形を続けて婆様の内的独白的な文にすることも可能だったはずである。ところが実際にはタ形で表されているために、婆様が「目玉が飛び出るくらい」と感じた渋柿の渋さを、語り手が外側から対象化したような表現となっている。

このような「意識の対象化」、つまり作中人物の行動や考えを外部から客体的に語る文体は、民話語りと相性が良い。元来、話し言葉だけで伝えられてきた民話は、耳だけで理解できるように語られており、複雑な修辞表現などは敬遠する傾向にあるという。すると必然的に、小説では好まれるような登場人物が何を考えていたかなど繊細な内面描写は避けられ、起きた出来事だけを淡々と語る語り口——すなわち、一步引いた視点から客観的に語っている印象を受けるタ形が相応しいということになる。昔話研究者の小澤俊夫は次のように述べている。

出来事として重要な、いちばんもとの動詞だけで語っているから、このように明瞭な場面が浮かび上がってくるのです。それは、マックス・リュティがいう、「昔話は描写しないで記述するだけである」という性質そのものであるということが出来ます。

(小澤、1999)

このように考えると、昔話の語りにタ形が多いのは、過去に起きた出来事を語るからという理由だけではなく、タ形で「意識の対象化」を行うことによって登場人物の内面描写にできるだけ踏み込まないようにするという語りの戦略のためでもあるとも考えられる。

こうした理由から、本資料もタ形がこれほどまで多用されていたと推測することができる。

4.2. 完成相非タ／タッタ

完成相タに次いで多かったのが、タやタッタといったテンスなしで表現する方法（～ル、～ダなど）で、地の文全体の約2割を占めていた。

先述のとおり、タ形には登場人物の意識を対象化する機能があることを述べたが、これを逆に言うと、タ形を用いずに表現することは、登場人物の内的意識を登場人物の内的意識のままにとどめておく効果が期待できると考えることができる。

(4) 伝三郎ア、豆料理を数え始めだ。(中略) なんぼ数えでも、四十六しかねエ。二つつ足りね。伝三郎アばだめいだ³⁷。ばだめいだんども、ハア、どうもせね。大晦日の当日だもえ。これらこさろう³⁸にも、間に合わねエ。

「伝三郎長者」

(5) 長治ア（石臼を）試しに回してみだ。したっきゃ、なんと！何も入れでねエのさ、あの隙間がらじゃらじゃら出でくるものがある。何だべがど思って、よぐよぐ見だらば、米でねエが！回せば回すほど、米アじゃらじゃら、じゃらじゃら出でくる。

「メドツの宝物」

(4)は、大黒様から48種類の豆料理を作るようお告げを授かった伝三郎が、作った豆料理の数を数えるという場面である。非タ／タッタ形にし、しかもそれを連続で用いることで、料理の数が何回数数えても足りないことに焦燥する作中人物の緊張感が、語り手の価値判断なしに聞き手へダイレクトに伝わってくる効果を持つ。

(5)の「じゃらじゃら出てくるものがある」や「米がじゃらじゃら出てくる」は、語り手が第三者的な視点からその様子を描写している文体であると考えられるが、その中間に「米でねエが！」という感嘆表現があることを考えると、その前後の文も長治の気付きを語り手が代弁していると考えたほうが良いだろう。この場面もやはり、石臼を引いたら米が出てきたときの作中人物の驚きが、臨場感をもって聞き手に伝わる。

タやタッタ等のテンスなし表現は、こうした作中人物の知覚や気付きを表現した文において多く用いられていた。また、これらはいずれも作中人物が実際に言語化して発言しているわけでもないので、内的独白とも異なる。すなわち、作中人物が知覚したものの、言語化できていない段階の内的意識を、語り手が内的意識のままに（「意識の対象化」というフィルターを通さずに）聞き手に伝えている表現であると考えられる。このような表現に

³⁷ ばだめぐ＝あわてる

³⁸ こさる＝準備する

よって、聞き手はその作中人物に起きた出来事を、あたかも眼前で体感しているようなりアリティを共有する効果があると期待される。これは先述の「昔話は描写せずに記述する」と矛盾しているようにも思われるかもしれないが、複雑な修辞技法を用いない最小限の内面表現にとどまっているため、この原則は維持されていると考えられる。

(6) とごろが、この坊様ア、…（中略）…まなぐア見えねえどごで、自分が鯨に喰れだのも、な～んもらじアねえ³⁹。鯨の腹の中さス～っと入っていったじおな。

「鯨と坊様」

さらに(6)では、「眼の見えない坊様が鯨に食べられたことを理解していない」という作中人物が知覚すらしていない状況を語り手が代わりに述べており、それが「鯨の腹の中に入っていた」というユーモラスな場面へとつながっている。非タ／タッタ形が「登場人物が知覚したものの言語化していない情報」を語り手が代弁できることは先述したが、(6)のように「登場人物が知覚すらしていない情報」であっても、語り手は言語化することができる。このような特徴のためか、否定表現「ない」「あんせん」はタ／タッタ形をともなわずに現れることが多かった。

以上をまとめると、非タ／タッタ形の表現は、作中人物の内的表現を内的表現のまま（たとえ作中人物自身が知覚していなくても）伝えることで、作中人物の目の前に起きている出来事を、臨場感を込めて聞き手に伝えられる効果があると言える。

4.3. 完成相タッタ

東北方言には、タッタ形という独自のテンス形態が存在する。竹田（2020）によると、これはテアッタが縮約されて成立したもので、現在と切り離された過去の意味を持つという。本資料では、タッタ形は51文観測された。

ただし、本資料において「タッタ」と共起した動詞は存在動詞「いる」のみ、つまり「いだった」という表現のみが観測できた。また、文例を具体的に確認してみると、物語の冒頭で「昔々、あるところに〇〇がいだった」という形で現れることが圧倒的に多く、51の用例中、物語の冒頭で「昔々、ある所に〇〇が『いだった』」というような形式で現れたものが、41例確認できた。

(7) むが～し、むがし、あるどごさ、正直者で稼ぎ手の爺様アいだったじ。

「山の中の宝物」

(8) むが～し、むがし、ある所に一人暮らしの婆様アいだったず。

³⁹ らじアねえ＝理解できない

「百枚のたんぼ」

竹田(2020)は、タッタは遠い過去を表す時間副詞と共起することで「出来事と発話時現在との断絶性」が強調され、「回想」の用法が強められた表現になると指摘しており、「昔々」という時間副詞がある(7)や(8)は、竹田の主張を裏付ける文となっている。確かに爺様も婆様も遠い昔の人物で、現在とはなんの繋がりも持たないかのように思われる。

ところが、ここで一つの疑問が浮かぶ。そもそも民話語りという形態自体が、出来事と発話時点とが断絶された遠い昔の出来事を語っているはずであるはずなのに、どうして「出来事と発話時点との断絶性」という特徴を持つタッタ文がこれほどまで少なく、しかも物語冒頭という特定の場面にばかり集中しているのか、ということである。それは、民話語りという形式の独自の構造によるものと考えることができる。

地域にもよるのだが、昔話は「昔々…」などの定型の発端句から始まり(発端)、物語が進行する部分を挟んで(展開)、終わりもやはり定型の結末句によって締めくくられる(結末)ことが多い⁴⁰。発端句は聞き手を空想に満ちた物語世界へといざなうためのいわば枕詞であり、結末句は物語世界を旅してきた聞き手を現実世界へと引き戻す役割を持つ言葉である。

昔話がこのような構成を持つなか、タッタが登場するのは大半が冒頭の発端句周辺、物語の背景を語る箇所である。この時点では、爺様や婆様は遠い遠い昔の「いだった」者として語られる。ところが、物語の背景説明が完了して物語が本格的に語られ出すと、タッタで語られていた爺様や婆様もあたかも実在したかのような人物として動き出し、「いだ」などタッタ以外の形で語られ始める。こうして始まる展開部において、語り手は出来事を「本当にあったこと」として語り、聞き手はそれを「本当にあったこと」として受け取り、あたかも作中人物に起きた出来事を実際に追体験しているかのような場が形成されていく——というのが、民話語りの場である。そして、そのような「追体験」の場には、発話時点と出来事時点の断絶はない。こうして物語が終わると、語り手は結末句を発することによって物語世界での遊びに区切りをつけ、聞き手を現実世界へと連れ戻す。

そのような民話語りの構成を考えると、発話時点と出来事時点の断絶を表すというタッタは、少なくとも民話の冒頭部以外においては相性が悪いと考えるのが妥当であると言えるだろう。民話は決して今と無関係に存在するのではなく、今ここにも開いているものなのである。以上が、当資料においてタッタ形の出現頻度が少なく、しかも出現場面に偏りがあった理由であると考えられる。

⁴⁰ 南部地方の民話では、「どっとはらい」が結末句にあたる。

4.4. 継続相（非敬体）

ここでは、継続相のテ（イ）ル、テ（イ）ダ、テラ、テ（イ）ダッタ、テラッタについて考察を行う。

竹田（2014）によると、これらはいずれも継続形を表すが、テダとテラは現在・過去の継続形（どちらの意味になるかは文脈による）で、テダッタとテラッタは過去の継続形であるという。それぞれの「ダ」と「ラ」の違いは、単に[d]と[r]の子音交替である（意味の区別を持たない）と考える見方もあるが、津田（2013）によると、「テラ」はその出来事が存在することのみを表すという眼前描写性を表すのに対し、「テダ」は、もっぱら他者への伝達を意図する場合に用いられるという弁別性を持っているという。本論では、竹田（2014）や津田（2013）と照応しながら考察を試みる。

・テ（イ）ダッタとテラッタ

まず、テ（イ）ダッタとテラッタについて比較・考察する。本資料では、両者は文末助詞「じ」の共起率が異なっていた。当該方言には、述部に後続して「～（だ）そうだ」という伝達の意味を付加するジという文末助詞が存在する。本資料上では「ず」と表記されることや、強調の意味の「おん」などを添えて用いられることもあったが、「て（い）だった」「てらった」の両者について、この文末助詞「じ」が後続した文数を集計すると以下のようになった。

表 5 テ（イ）ダッタ、テラッタに後続した文末助詞

	後続助詞なし	+ジ	+その他助詞	合計
テ（イ）ダッタ	8	51	2	61
	13.11%	83.69%	3.28%	
テラッタ	7	13	10	30
	23.33%	43.33%	33.33%	

表 3 が示すとおり、テ（イ）ダッタはジの後続率が、テラッタと比べて非常に高いことがわかる。ジの共起が起こる条件については、その他にも本動詞との相性や前後の文脈など複合的な要因も考えられるが、ジが伝聞の文末助詞であるという性質上、テダは主に伝聞的な文脈で用いられるという津田（2013）の見解と決して無関係ではないと考えられる。

一方、テ（イ）ダッタにはなく、テラッタのみで見られた用例については、物語の途中で組み込まれる語り手自身によるメタレベルの推測や気づきの文が観測できた。

(9) 面ァ洗っただけで村の人んどァ集まってきた。んだべ、大事だ相談この前にマンマみ

ったの⁴¹よ喰ってられるがって、みんな思ってたんだべな。

「イダコマイマイイシ」

- (10) あ〜、ほんだ、ほんだ。忘れでらった、忘れでらった。あのなす、あの建物だんども、
屁よふってもいい建物だすけ、屁の建物で部屋ど呼ぶようになったそうであんすえ。

「へったれ嫁ゴ」

(9)下線部は飢饉の危機の中、大漁祈願の神様である恵比寿様に供え物をするために集まった村人の心境を語り手が推測する状況で、(10)は語り手が下線部以下のことを思い出すという状況の文となっている。これらはいずれも物語中の出来事をそのまま語り伝えるのではなく、語り手自身の主観的な判断が入っている文なので、津田(2013)の言う眼前描写性を述べるとされるテラ(ツタ)を用いるのが相応しいと考えられる。このような語り手の主観を述べた文でテ(イ)ダツタを用いたものは観測されなかった。

- (11) とにかぐ、みんなして、「グス」「グス」ど呼んでいだったじ。

「うすのろのグス」

- (12) この辺りの人んどァ、この沼よ八太郎沼ど呼んでらったじおな。

「沼の主どお姫様」

一方で、(11)と(12)のような極めて類似した状況を述べた文であっても、実際の用例はテ(イ)ダツタとテラツタに二分されるパターンもいくつか観測された。両者の使用実態を明らかにするには更なる調査を必要とするが、両者は必ずしも厳密に使い分けられているわけではない可能性もある。

以上をまとめると、本資料におけるテ(イ)ダツタとテラツタは、前者は伝聞性、後者は眼前描写性という状況で用いられる傾向があり、津田(2013)の見解と一致する側面が見られた。しかしながら、不明瞭な部分も多いため、これからも更なる調査を必要とする。

・テ(イ)ル、テ(イ)ダ、テラ

次に、テ(イ)ル、テ(イ)ダ、テラについて考察する。まず、テ(イ)ダとテラの対立については、本資料ではテラが1文しか現れなかったため、96文現れたテ(イ)ダとの比較考察はできないが、一方でテ(イ)ルは52文と比較的頻繁に現れた。津田(2013)では、テ(イ)ルは恒常的な状態を述べるときに積極的に用いられると述べているが、本資料においてはそのような文はほとんど見られなかった。本資料においてテ(イ)ルが用いられる文は「んでねえが」(=のではないか)が後続するものが極めて多く、テ(イ)ルが使用された全52文中43文が「て(い)るんでねえが」という形で実現していた。

⁴¹ みったの=のようなもの

(13) しだどごろが、なんと！庄屋様は病気どごろが、ぶんぐり⁴²畑仕事よやってるんでねえが。

「うそ八百の話」

(14) したっきゃ、隣の部屋さ明がりっこアついでいるんでねえが。

「鬼婆と小坊主」

(13)、(14)に見られるように、テ（イ）ルンデネエガは、いずれも作中人物の眼前に起きている出来事を驚嘆的に述べる表現として用いられている。このようなテ（イ）ルの用いられ方から推察すると、本資料において、継続相のうち眼前描写性に特化しているというテラの出現回数が極端に少なかったのは、テラとは別に眼前描写性を表現するテ（イ）ルンデネエガが、テラの代わりを果たしていたためであるという解釈をすることもできる。

一方、テ（イ）ダは、竹田（2014）によると現在・過去の両方を表すことができるというが、本文で登場した文例は、いずれも過去の意味でのみ用いられているようであった。

(15) その後、あまのじゃぐア、着物よ着て瓜子姫コに化げで、ギッコンバツタン、ギッコンバツタン機よ織っていじ。

「瓜子姫コ」

(16) その夜のごどだ。大漁よした漁師の家よ、何人かが、こそっと見張っていじ。

「鶏に滅ぼされた村」

このように本資料においては、テ（イ）ルは現在の継続相、テ（イ）ダは過去の継続相というように共通語と一致する用法で使われていた。これは共通語の影響によるものなのか、あるいは地の文と呼ばれる叙述文独自の表現なのか、そしてテ（イ）ダが過去を表すのなら、テ（イ）ダッタあるいはテラッタとどのように使い分けられているのかなど様々な疑問がわいてくるが、残念ながら、本論ではその詳しい実態を明らかにすることができなかった。これらについても今後の研究課題としたい。

4.5. 継続相（敬体）

最後に、継続相の丁寧形「テオリアンス」、「テオリアンシタ」について考察する。

当資料には、「ておりあんす」、「ておりあんした」という表現がいくつか見られた。存在動詞「オル」自体は本来の東北方言には存在しないものだが、「テオル」に「です」「ます」に相当する丁寧形「アンス」が後続した「テオリアンス」「テオリアンシタ」は、継続相「テ（イ）ル」「テ（イ）ダ」の丁寧な形として定着しているものと考えられることができる。

⁴² ぶんぐり＝元気の良い様

(17) 今でもなす、ひとモッコど呼ばれる地名が残っていて、そごいらさば石ころが多くて、あの戦の名残だごったって言われておりあんすんだ。

「八の太郎」

(18) 鮫⁴³の漁師んどア、鯨よ、大漁の神様、恵比寿様ど、大事に祀っておりあんしたんだ。

「鯨の八戸太郎」

全体的な傾向として、本資料においては、「テオリアンス」は(17)のような物語世界で起きた出来事が現在にも何らかの形で影響力が持続していることを聞き手に伝えるとき、「テオリアンシタ」は(18)のような昔の継続的に行われていた慣習などを聞き手に付記的に伝えるときに多く登場する傾向があった。

今回は継続相のみの調査であったが、本資料では、このような明らかに聞き手を意識しているとみられる敬体表現がたびたび現れた。最初にも述べたとおり、本資料は単純に読み物としてだけでなく、実際に多くの人に語り聞かせることを想定して書かれている。したがって、本資料が非敬体表現を基調としながらも、「テオリアンス」「テオリアンシタ」といった敬体表現が随所で盛り込まれていたのも、物語の内容を一方向的に述べるだけでなく、聞き手に語り伝えるために書かれているという本資料の特徴が、文法表現においても現れたからと解釈することができるだろう。

詳しく検証しようとするると丁寧形「アンス」の用法の詳細な検討に踏み込むことになり、それは本論の域を越えるのでこれ以上の考察は控える。しかしながら、このような敬体／非敬体表現の混在は、一般的な三人称小説では見られにくい珍しい現象である。これが本資料に特有の特徴なのか、民話資料全体に現れる現象なのかは、更なる調査を必要とする。

5. 最後に

以上、八戸市方言で書かれた民話資料に現れたテンス・アスペクト表現について分析を試みた。大量のテキストデータを集計・分析することで、以下のことがわかった。

まず、民話資料に現れたテンス・アスペクトの使用文数を集計することで、それぞれのおおまかな使用頻度を明らかにした。民話資料はタ形を中心としながらも、場面に応じて様々な形態のテンス・アスペクト表現を使い分けており、それが物語に臨場感をもたらしているようである。また、テ(イ)ダッタ・テラッタについては両者の比較や用例の考察

⁴³ 鮫 = 八戸市の地名

などを行うことで、その使い分けは先行研究と一致することを部分的に明らかにすることができた。現在データの整備が進んでいる COJADS や種々の資料と併用しながら分析すれば、方言の言語現象をより深く明らかにできる可能性がある。

一方で、民話資料におけるタ形やタッタ形などのふるまいは、日常会話のそれとは異なる様相を見せる。これは民話語りという特殊な状況が持つ、物語を過去の出来事として語りながら、その不可思議な出来事が本当にあったかのようなリアリティを含ませ、なおかつ物語世界と現実世界の間を容易に移動するなどといった独自の性質に大きく起因していると思われる。「方言で語られる民話は独自の趣がある」とは方言イベントにおける民話語りによく聞かれる感想だが、それはこうした「民話の文法」が影響している可能性もある。民話独自の言語表現を更に詳しく分析することで、民話の魅力、ひいては方言の魅力の再発見につながられていくことが期待できる。

なお、今回用いた民話資料は榎谷氏によって再話されたものであったが、本資料は榎谷氏自身の文体的特徴、つまり個人差が強く表れていた可能性もある。特に、榎谷氏は方言演劇の活動などにも長年取り組んできた経歴を有しているため、演劇的な要素も民話資料の文体に組み込まれていたということも考えられる。今回見られた結果が民話資料全体に言えることか、あるいは個人的特性かどうかを確かめるには、原話の文字化テキストや他の再話話者のテキストなどとの比較も行っていく必要がある。

最後になったが、冒頭でも述べた通り、方言の保存活動と民話の伝承活動は親和性が高く、今後も方言の保存活動において民話は重要な位置を占め続けることが予想される。方言のどのような表現が民話の語りに深みを与えているのかを分析・考察することは、方言の保存にも民話の伝承にも大きな貢献をもたらすことが期待される。しかし、方言の分析のために民話資料を用いるのではなく、民話資料「自体」の方言表現について詳しく分析する研究はまだ多くない。八戸市方言に限らず、全国に数多く存在する方言の民話について、言語的な考察がより深められていくことを、僭越ながら願っている。

調査文献

榎谷伸夫 (2019) 『南部昔コ語り部養成講座 第1回テキスト』

参考文献

小澤俊夫 (1999) 『昔話の語法』 福音館書店

工藤真由美 (1995) 『アスペクト・テンス体系とテキスト』 ひつじ書房

- 能田多代子（1982）『青森県五戸方言集』国書刊行会
竹田晃子（2020）『東北方言における述部文法形式』ひつじ書房
竹田晃子（2014）『岩手県盛岡市方言』方言文法研究会・編「全国方言文法辞典資料集(2)
要地方言の活用体系記述」 pp.33-44
津田智史（2013）『日本語方言アスペクトの研究』東北大学文学研究科博士論文
平山輝男・編（2003）『青森県の言葉 日本のことばシリーズ』明治書院
柗谷伸夫（2014）『南部昔コ集 第一集』アート&コミュニティ
柗谷伸夫（2016）『南部昔コ集 第二集』アート&コミュニティ

【付記】

本研究は、八戸市公民館館長の柗谷伸夫氏のご協力によって行うことができました。資料を提供して下さった柗谷氏に感謝するとともに、長年に渡って方言や民話の保存・伝承活動を続けられている氏に心から敬意を表します。